
実録！働く女の婚活日記

相原ミヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実録！働く女の婚活日記

【Nコード】

N9561Z

【作者名】

相原ミヤ

【あらすじ】

結婚したい。周りが次々と結婚している中、仕事一筋の私は決意した。よし、婚活をしよう。婚活のために、まずは決意して宣言しよう。結婚するため毒を吐きながら努力する、働く女の婚活日記です。

まずは決意して宣言しよう

結婚したい。

結婚したい。

ああ、結婚したい。

つくづく思う。

ああ、結婚したい。

結婚が一番なわけじゃない。でも、幼い頃から信じていた。

24歳で結婚して、25歳で母になる。

時が来れば、自分にも王子様が現れると信じていた高校時代。辛い恋を経験した専門学校時代。そして、社会の流れに追われた最近数年間。

気づけば、幼い頃の人生計画は狂っている。

今日も一人で家に帰る。

ポストに一通の封筒が入っていた。

結婚式の招待状。

なんともめでたい連絡に、私は一つ溜息をついた。

今年で七回目の結婚式。友人代表の挨拶は今年三回。生まれた友達の子供は三人。

「ご祝儀貧乏つてあるんだね。
そんな笑い話はもう沢山だ。」

別に結婚が一番なわけじゃない。でも、なんだか寂しい気持ちになる。友達よりも彼氏を選択し、友達よりも旦那や子供を選択する。私にとって、友達はいつでも一番なのに、友達にとって私は二番、三番とみるみる降格していく。

（結局、私は何番？昔は、困ったときはいつでも駆けつける。そんな仲だったのに。私はいつでも、駆けつけるよ。もちろん、今でも同じだよ）
そんなこと、言えるはずが無い。笑顔で友達の幸せを祈り、断られるのを知りつつ笑顔で遊びに誘うのだ。

ああ、哀しい。

今の日々に不満は無い。ようやく仕事にも慣れて楽しくなってきた。お金のある自由もある。趣味に費やす時間もある。

（結婚なんて、自分の時間がなくなるだけだよ）
高らかに笑う友達。もちろん、旦那持ちだ。

藤田千香子。年齢二十五歳。結婚にはまだまだ早い、と言う人もいるけれども、私は結婚したい。結婚したい。とにかく、結婚したい。

なぜって？

一人じゃ寂しい。

このまま、私は一人で生涯を終えるのではないかと、心配になる。

そのためには、最近はやりの婚活が必要だ。出会いの少ない仕事をしている私にとっては尚のこと。そして、仕事ばかりしている私にとっては、必要なこと。それが「婚活」だ。

「結婚したい」という気持ちに揺るぎは無いけれども、日々が楽しくてなおざりになって、気づけば一年が終わっている。そういうことにならないために、私は大きく宣言した。

「私、婚活します！」

レッツ婚活。まずは決意して宣言しよう。

まずは決意して宣言しよう（後書き）

出会いが無い。理想が高い。それでも結婚したい。そんな女性の気持ちを、笑いを交えて書けたらと思っています。気長にお付き合いください。

客観的に自分を評価しよう

婚活をすると、まずは決意して宣言したら、客観的に自分を評価しよう。

私、藤田千香子。

年齢25歳。

職業、介護福祉士。

彼氏いない暦……2年半。

中学、高校とバレー部に所属してキャプテンとしてチームを率いた。高校を卒業した後は、介護福祉士になるために専門学校に通い、介護福祉士になった。

幼い頃からバレー一筋で生きてきた私は、自他共に認める体育会系。可愛い女の子を演じることは出来ない。

職場は有料老人ホーム。介護負担がどんなに大きな人でも受け入れるのが、うちの施設長のモットーだから、必然的に仕事の量は多くなる。けれども、元来お年寄りが好きな私にとって苦はない。月に5〜6回ある夜勤も、何のその。サービス残業も何のその。おじいちゃんに怒鳴られようが、おばあちゃんに叩かれようが、何のその。自分より10キロ以上重い人を抱えて車椅子に乗せる。鍛えてもいないのに、立派な上腕二頭筋が完成している。

気づけば、どんな状況にも屈しない強靱なハートと、度胸を兼ね備えた一流の介護士になっていたのだ。

高校の時は、部活の仲間やクラスの仲間によく言われていた。

「きっと、チカポンが一番に結婚するだろうね」

根拠のない評価。

「きっと、チカポンが一番に子供を生むよ」

さらに、根拠のない評価。

「チカポン、可愛いもん」

こんな女同士の評価に惑わされちゃいけない。第一、私は一人身。そうやって私を評価していた仲間が次々と結婚していくのだ。そう、客観的に自分を評価しよう。

7

私は一流の介護福祉士。仕事一筋で恋愛なんて遠くにある。不規則な仕事をしているから、出会いなんてあるはずが無い。力仕事をしているから、たくましい。簡単には弱音をはかない。女社会で生きていくから、メンタルも強い。その上、バレー一筋で生きてきたから、面倒なほどの真面目人間。

これが私。

客観的に自分を評価して分かること。

「女として、可愛くない」

自分でも分かる。男は馬鹿だから、結局は可愛くて弱い子が好きで

しよ。私は間逆。背も高いし、強いし、たくましい。男に甘えるよ
うな、女子力を持ち合わせていない。
これが私。

この私を受け入れてくれる人を探すのか、この私を変えるのか、
どちらが早いのか私は頭を抱えた。

客観的に自分を評価したら、男が好む女を観察しよう。

男が好む女を観察しよう

男が好む女を観察しよう。

モテない女子である私は、男が好む女を観察して、女子力とは何なのか観察しなければならない。

観察対象は私の天敵「江藤のぞみ」だ。この女、とにかく男にモテる。分かっている。ただの癖みだっただけでも、負け犬の遠吠えだっただけでも、悔しいから、仕事の時の江藤のぞみの様子を観察してみることにした。

観察対象、江藤のぞみ。

年齢、27歳。

職業、介護福祉士。

口癖「ねえ、ねえ、どうしたら良いかな」

男が好む女を観察しようと思った翌日、私は職場で江藤のぞみの姿を探した。私が勤める有料老人ホーム「ひまわり園」では、六十人の高齢者が入居している。私は働き始めて四年目の介護福祉士。今日は早出なので、朝七時から勤務についた。朝の起床の介護をして、身支度の手伝いをして、食事の介助を行う。朝食が終わる八時半に、日勤で出勤してきた江藤のぞみの姿を見かけた。

悔しい。

私は身長168センチメートルの長身の持ち主。対する江藤のぞみは身長155センチメートル。27歳に見えない童顔。これが、男が好む女の外見だ。

外見だけじゃないはず。

私は江藤のぞみの一挙手一同を見逃さないように観察した。

朝食が終えた入居者の方の歯磨きを手伝い、排泄の介助をする。オムツを替えて、身体を拭いて、服を着替える。働き始めてから、仕事が苦に感じたことは無い。

もちろん、寝たきりの人の介護には腕力が必要になる。

「おいしょー！」

なんて、気合の掛け声をかけながら、私は介護を続ける。介護をしながらでも、入居者の方との会話は忘れない。

私がそんなことをしていると、遠くから江藤のぞみの声が聞こえた。

「ねえ、ねえ。ちょっと、あの人重いかから手伝ってくれない？」

私の耳に江藤のぞみの不快な声が残る。私は入居者の方に布団をかけて、声をかけた。

「もう、きれいになったよ。お疲れ様」

入居者の方には礼儀正しく、敬語を使って。というのが、施設の基本方針であるけれども、24時間共にしていると、家族のような気持ちで芽生えてくるのはご愛嬌だ。

廊下に出た私は、観察対象の江藤のぞみを探した。

江藤のぞみを手伝っているのは、職場の若手男子「山田弘一」だ。この山田、かなりの馬鹿者で、江藤のぞみの頼みを断れない。なぜ、そのような関係になれたのか、私は秘訣を探した。それが、男が好む女の姿だから。

「ねえ、ねえ。あの人重くて無理だよ」

江藤のぞみが言った。その言葉で、私はピンときた。

もし、私が同じような状況だったら……。

「おいしょー！」

の一言で、一人で片付けようとしてしまう。そして、身体が大きな私は、一人で片付けてしまう。

「ねえ、ねえ。ちょっと、こっち来て」

なんて、言葉、口が裂けても言えない。さすが、私の天敵「江藤のぞみ」だ。

重たい入居者様を前に「ねえ、ねえ。どうしたら良いかな。一人で出来るかな？」と小首をかしげて。それが、愛され女の秘訣。ついでに、軽いボディータッチがあれば文句なし。

男は弱い女を好む。私は今日、それを学んだ。

キーワードは「ねえ、ねえ。ちょっと助けてくれない？」

これで行こう。

婚活には男に好かれることが必要。だから、私は醜くても、腹立たしくても、男に好かれる女「江藤のぞみ」の真似をすることを決めた。

男に好かれる女になろう。男が好む女を演じてみよう。

男が好む女を演じてみよう（練習編）パート1

婚活。それは男と女の真剣勝負。

客観的に自分を評価して、今の自分は魅力が無いことを知った。いわゆる女子力ゼロという状況だ。哀しくも体育会系の生真面目人間の私は、男に甘えることが出来ない。天敵「江藤のぞみ」から会得した秘訣。

私は「ねえ、ねえ」と男に物事を頼むことを決めた。

練習相手に選んだのは、中学時代からの友達。翌日、私は友達を呼び出した。

私の友達、沢原朋子。

中学時代、そして高校時代のバレエ部仲間。
職業、看護師。

彼氏あり。（婚約者あり）

私が気を許せる大切な友達。

高校時代から仲間の朋子は、彼氏（婚約者）とも知合いで、気心の知れた仲間だ。私は介護福祉士。朋子は看護師。お互いに、似たような業界に所属しているから互いの苦労も分かる。なんせ、朋子が働き始めてから彼氏と破局しそうになったときも、私が間を取り持ったのだ。

（チカの面倒見の良さには呆れるよ）

なんて言葉を交わしながら、支えあってここまで来たのだ。お互いに不規則な生活だから、こつやって平日に悠々と時間を過ごすことができる。

行きつけのカフェに向かい合って、私と朋子は他愛のない話をした。互いの近況や職場の愚痴。朋子からは彼氏、戸田隆史の話も聞かされた。二人はタージー、トンコと呼び合うバカップル。それでも、何年も二人を見ているから、憎めない。

(ねえ、ねえ。助けてほしいんだけど)

私は心に決めたキーワードを心の中で反芻しながら朋子を見た。朋子とは長い間一緒にバレエをして、気心の知れた仲。同じように、体育会系の中で青春を過ごし、同じように医療・福祉業界に就職した。同じように、一風変わったキャラクターで、同じようにモテない時代も過ごした。

朋子だけ婚約を決めたことを憎んだりしていない。しかし、悔しさで寂しさは隠しきれない。だから、朋子を相手に練習をしても、朋子は怒ったりしないだろう。朋子は私の作戦を知る由もなく、私に話しかけていた。女が顔を合わせれば、自然と話に花が咲き時が経つのを忘れるものだ。

「ねえ、チカ。この前、タージーと一緒に映画を観ただけだね」
朋子は映画が好きだ。新作映画にDVDに、こと細かくチェックしている。どこか哲学めいて、深いところで物事を考えているのが朋子だ。バレエ部の参謀として、一緒にチームを率いてくれた。そんな朋子の一面を知っているから、私は朋子に惹かれるのだ。

朋子のことだ。私が、男が好む女を演じたら、どんな反応を示すのか想像もつかない。

驚く？

笑う？

それでもいい。とにかく、私は結婚したい。一人は寂しいから。

「ねえ、ねえ。朋子。ちょっと助けてほしいんだけど」

手を伸ばして、朋子の手をたたきながら言った。その仕草は江藤のぞみに引けをとらない。一度、気安い関係である朋子で試しておかないと、男の前で演じることなどできない。私の心臓は強く脈打っていた。女相手でもこれほど緊張するのだ。きっと、江藤のぞみは、私以上の鋼鉄のハートの持ち主なのだ。

カチャン

朋子が驚いたようにカップを置いた。

男が好む女を演じてみよう(練習編) パート1(後書き)

あけましておめでとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

男が好む女を演じてみよう（練習編）パート2

私は友達朋子を相手に、男が好む女を演じてみた。

江藤のぞみから会得した秘密技。
可愛い女の仕草。

婚活に大切なのは、まず男に好まれること。男に好まれ、愛される女でなければ、どんなに努力したって無駄なこと。愛されなくては、何もかもが水の泡だ。助けてくれる人がいないのに、海で溺れてもがいているようなもの。

私の心は荒波の中。男が私から逃げていく。婚活どころではない。

凍りつく空気。

朋子の顔が凍りつき、次第に歪むように綻ぶ。

「……………」

凍りつく私の心。

私の心は動揺し、緊張で背中に汗が流れた。

朋子は何事も無かったかのようにケーキを突いていた。

「この前ね、映画を観ただけど……………」

朋子が切り出した。

（映画？映画って？）

私は状況が理解できなかった。

「それが、面白くてね」

朋子は更に何事も無かったかのように続けた。

ああ、何も無かったんだ。なんて、私は思い、そして自らを否定した。あの空気の凍りつきは現実であり、朋子が私が切り出した話題を無視するはずが無い。

男に好かれるため、私は諦めることは出来ない。朋子で試すことが出来なくて、現実の男で実行できるはずが無い。この方法は、江藤のぞみが使っている宝刀。必ず成功するはずだ。

「あのね、トモ。私ね……」

私は諦めない。結婚したいから。男に愛されたいから。私は諦めない。結婚したいのか、男に愛されたいのか、よく分からなくなったけれど。

「ねえ、チカポン。何か悩みでもあるわけ？」

朋子が私の話を遮って言った。しかも、高校時代に呼ばれていた「チカポン」という呼び名で。

「ちよつと、チカポンって呼ばないでって言ったじゃん」

学生の頃はチカポンと呼ばれても気にならなかったが、今は気になる。なぜ、私はチカポンなのだろうか。

「そんな馬鹿なことしてたら、チカポンのままだって」

朋子はとても冷静で、緊張していた私は自分が馬鹿らしくなってきた。朋子はケーキを突いていたフォークを置いて身を乗り出してきた。

「ねえ、チカ。何か悩みでもあるの？」

朋子に隠し事は出来ない。ずっと一緒だったから仕方の無いことだ。私は正直に言った。

「婚活のための練習」

そう、全ては婚活のため。仕事一筋の私が結婚するため。笑うなら笑えば良い。例え笑われても、例え馬鹿にされても、私は諦めない。いかに自分が魅力の無い女なのか客観的に自分を評価して気づいたから。それに、バレーと婚活は同じはずだ。何があっても、諦めなければ勝利への道は必ず開く。上手い奴の真似をしる。盗め。私は江藤のぞみの技を盗んだだけなのだ。

自分の魅力を考えよう パート1

結婚したい。純粋な思いは変わらない。江藤のぞみという男に愛される存在の真似をした私を、朋子は真正面から否定した。

「なるほどね、婚活ねえ。まだ、早いでしょ。私たち25だよ」

朋子は笑った。もちろん、年々女性の結婚の年齢は少しずつ遅くなり、30でも遅くないと言われている。

しかし、親戚から言われるのだ。

チカちゃん結婚はまだかえ？

母から言われるのだ。

あんだ、合コンぐらい行っているの？

職場でおばあちゃんたちに言われるのだ。

早くいい人探さんとね。

職場でおじいちゃんたちに言われるのだ。

子供は保育園に預けとるんかえ？

(いえ、いえ。結婚していません)

なんて言えるはずもなく一人苦笑い。確かに、世間一般からすると婚活をするには早いかもしれない。しかし、働き始めてから、ろくな出会いはない。仕事一筋。曜日も昼も夜も関係なく仕事。サービス残業当たり前。夜に出歩くことなんて出来ない。

このままじゃ腐ってしまう。

このままじゃ腐ってしまうのだ。このまま今の生活を続けていて

は、永遠に結婚なんて出来ない。だから婚活が必要なのだ。

「早くなんて無いよ」

私は朋子に言った。働く25の女。婚活をするには早くない。第一、そのように言う朋子だって結婚相手を決めている。

このままじゃ腐ってしまうのだ。

朋子は小さく笑った。

「確かに、最近結婚が多いもんね。俗に言う第一次結婚ブームって奴だね。その波に乗りたかって気持ちは分かるけど、なんかチカラしくないよ」

そう言う朋子だって結婚を決めている。信頼している朋子であっても、女としての勝負に負けたようで、単純に嫉妬を抱いてしまう。

朋子が相手のいない私を馬鹿にしているように思えるのだ。

「そういうトモだって、タージと結婚を決めているんでしょ」

私は心から嫌味を込めてやった。友達にそんなことをしたくないけれど、今の私は苛立っていた。獲物を前にして逃げられたライオンのような気持ちだ。

朋子は笑った。

「確かにね。私も結婚を決めているけど、私はそんな女を演じたりしてないよ」

それは勝者の余裕だ。

「世の男は江藤のぞみ、みたいな女が好きなんだって。結局男は可愛い女が好きなんだよ」

私は自分の分析を朋子に伝えた。男が可愛い女が好き。護ってあげたい女が好き。私のように大きくて強い女は男に好まれないのだ。男に好まれなければ、結局今のままだ。腐っていくのを待つしかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9561z/>

実録！働く女の婚活日記

2012年1月6日10時52分発行